

ライタ・ラースローは1892年6月30日にブダペストで生まれた。学校卒業後、両親の希望により政治学の博士号を取ったが、彼は自分が音楽家になることが小さいときからわかっていていた。

ローマ文化とビザンチン文化を分ける、カルパチア山脈から数マイルしかはなれていないエルデーイ（トランシルバニア）地方の出身であることが、ライタに精神的な影響を与えた。10世紀も前にセーケイ人が住みついたその地方は世界でも有数の民族音楽の宝庫で、彼はそこから若いときにうけた感触を決して忘れなかった。またライタの音楽を決定づけたもうひとつの要因は、18世紀のフランス音楽およびドビュッシーであった。ライタは12歳のときにもうクーアランやドビュッシーを演奏した。

彼は作曲とピアノの勉強を1913年にブダペストの音楽アカデミーでおえたが、在学中は音楽アカデミーの許可により毎年半期をライプツィヒやジュネーブ、パリの外国で学んだ。1909年に3か月のライプツィヒ滞在中、聖トマス教会でJ. S. バッハの作品を伴奏した。彼はフーガと対立旋律に腕をみせた。ライタはラテンの国に魅かれてライプツィヒからジュネーブへ、そしてそこからパリへ旅行した。

パリで彼はブダペスト音楽アカデミー名誉教授のヴァンサン・ド・インディに紹介された。インディはライタを気に入って、彼をパリの音楽生活にひき入れてくれた。ライタは1910年から14年までの間、毎年6か月パリに滞在した。彼はパリの街の雰囲気を感じ取り、ドビュッシー、ラヴェル、ストラヴィンスキーなど世紀の初演演奏会を聴くことができた。

それから生涯を終えるまで、ライタはパリや彼の学校に対して親愛の念を抱きつづけた。1916年にICO、のちのUNESCOもライタに門を開いてくれたが、彼にとってはパリが、芸術家のサロンとパリの人々と仲間と出版者と友人がいる場所であり、いつもすぐとけこむことができたし、故郷のためにのみ、あとにすることができた。この勤勉な芸術家は、どこに行ってもハンガリーの堅い意志とフランスの質の高さとどこでも通用する何かをもっていた。

1913年に最初の作品「ある音楽家の作品から」が出版された。ブダペストとウィーンですぐに大きい反響があり、すばらしいピアノ作品、という評判とともにすぐれたアヴァンギャルド作曲家の一人として若い音楽家をほめた。2つのピアノ作品の注文を受け、それらは1914年と15年に発表された。バルトークはライタのデビュー作品を、「信じられない勇敢さ」と評した。

音楽的活動についてのフランスとの関係は、ライタが4年間戦場に行っていた第二次世界大戦の間に切れてしまった。

1919年のおわりにブダペストの国立音楽所がライタを作曲と室内楽の教授に任命した。のちに所長となり、1950年まで在任した。またバルトークのあとブダペスト民俗博物館音楽部長となり、のち民俗博物館長を1950年までつとめ、2年間にわたり、ラジオの音楽部長としても役をはたした。

そののち共産主義体制の政治的理由から、すべての地位を免職となり、1948年から62年まで旅行も許されなかった。

1928年からバルトークとともに民俗音楽委員会のメンバーとなり、のち国際民俗音楽委員長となった。

1928年にパリのレデュック出版と最初の契約を結び、1928-39年の間にライタの才能と名声は大きくなった。

1930年四重奏団とともにクーリッジ賞を授かった。室内楽をトリトン楽団が演奏し、交響楽を定期的にフランスのラジオが初演放送した。ライタのフランスに対する傾倒はますます深くなり、作曲家のラヴェル、ルーセル、イベル、バロー、評論家のクロワ、シャッフナー、そして演奏家の友人も多くなった。とくにフローレン・シユミットと *a Le Temps* の仲間と深い友情を結んだ。そしてこの豊かな年月のおわりには、エコール・ド・パリの会員にもなった。

第二次世界大戦の間、在ハンガリーのフランス外交官の協力を得て、フランスや外国の友人や1948年頃からライタの専属出版社となったアルフォンゾ・レデュック出版と関係を保つことができた。

1947年の冬にパリへ旅行し、47年から48年にかけて一年ロンドンに滞在し、T. S. エリオットの作品にもとづいた「大聖堂での殺人」という映画の音楽を作曲した。

ライタは1951年にコシュート賞を授かり、1955年にゲオルグ・エネストの死去のあとフランスアカデミーの会員にえらばれ、1963年にブダペストで死んだ。

第二次世界大戦までのライタはアヴェンギャルド作曲家として評価できるだろう。この点でライタより11歳年長のバルトークと平行した歩みだといえる。彼は幅広い経験のおかげで、バロックの過度な点から解放されたすっきりした作品に到達することができた。それが祖国や自分自身の問題を解決することにもなった。1946年戦後初めてのパリ行きで、ライタはフランスのラジオインタビューに1938年から何をしていたか問われた。答えは「失われた

美を探していた。」というものであったが、そのあとにはたぶんこうつぶいたであろう、「—そして真実を。」

ライタは生涯を通じて音楽の規則正しさ、音楽化の完全さ、旋律の考え深さ、構造の確かさをもとめた。そして同時に作品の力強さや、劇的な強調を両立させることをめざした。確かな専門的知識と豊かな才能が、いつもきれいな泉のような仕事をするのに役立った。このことがライタを今世紀でもすぐれた作曲家となさしめている。